

竹取物語 上卷

今は昔、竹取の翁おきなと云へる者ありけり。野山にまじりて、竹を取りつゝ、萬づの事につかひけり。名をばさるき造みやつことなん云ひける。其の竹の中に、本光る竹なん一筋ありけり。怪しがりて寄りて見るに、筒つゝの中なか光りたり。其れを見れば、三寸許はかりなる人、いと美しくうて居たり。翁云ふやう、「我れ朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて知りぬ。子に成り給ふべき人なめり」とて、手に打ち入れて家へ持ちて來ぬき。妻めの女にあづけて養はす。美しくしきこと限なし。いと幼ければ籠こに入れて養ふ。竹取の翁竹と

るにこの子を見つけて後に、竹を取るに、節ふしを隔よこて、節毎ごとに金こがねある竹を見つくる事かさな豊りぬ。かくて翁やうやう秋田ゆたかに成り行く。此ちこの兒養ふ程にすく／＼と大おほきに成りまみつきさる。三月ばかりなる程に、よき程成る人かみあに成りぬれば、髪上かみあなどそうして、髪上かみあげさせ、裳とばり著す。几帳の内なよりも出さず、いつきかしづき養ふ程に、此ちこの兒のかたちけそひかりうなる事世になく、家やの内は暗き所なく光満ちたり。翁心地あしく苦しき時も、此の子を見れば苦しき事も止やみぬ。腹立しき事も慰みけり。翁竹を取る事久しくなり榮えにけり。此の子いと大きに成りぬれば、名をば三室戸齋部男みむろといんべのあきたを呼びて附けさす。秋田

なよ竹のかぐや姫と附け侍る。此の程三日、  
打ちあげ遊ぶ。萬づの遊をぞしける。男は  
うけきはらずよび集へて、いとかしこく遊  
ぶ。世界の靨、貴なるも賤しきも、いかで  
此のかぐや姫を得てしがな、見てしがなと  
音に聞きめでて惑ふ。其の傍の垣にも家の  
とにも、居る人だに容易く見るまじきもの  
を、夜は安きいも寝ず、闇の夜にも此所彼  
所より垣き君達間見惑ひあへり。さる時よ  
りなんよばひとは云ひける。人の物ともせ  
ぬ所に惑ひ歩けども、何の効あるべくも見  
えず。家の人共に物をだに云はんとて、云  
ひ懸くれども、ことゝもせず。邊を離れぬ  
益、夜を明し日を暮す人多かりける。おろ

かなる人は石上なき歩はよしなかりけりと  
て來ずなりにけり。其の中に猶云ひけるは、  
色好と云はるゝ人五人、思ひ止む時なく夜  
晝來りけり。其の一人は石作皇子、一人は  
車持皇子、一人は右大臣阿部三連、大納言  
一人は大伴御行、中納言一人は遣もろたか  
此の人々なりけり。世の中に多かる人をだ  
に、少しもかたちよしと聞きては、見まほ  
しうする人達なりければ、かぐや姫を見ま  
ほうして、物も食わず思ひつゝ、彼の家に  
行きて、たゞずみあるきけれども、かひあ  
るべくもあらず、文を書きて頼れども、返  
事もせず、侘歌など書きて遣すれども、か  
ひなしと思へども霜月極月の降り氷り、六

月の照りはたゞくにも障らず來たり。此の人々、或る時は竹取を呼び出だして、「娘を我れに賜べ」と伏し拜み、手を摩りの給へば、「己が、なさぬ子なら、心にも從へず」となん云ひて月日を送る。かかれば此の人々家に歸りて物を思ひ、祈禱をし願を立て、思ひ止むべくもあらず。さりとも遂に男合せざらんやはと、思ひて強をかけたり。在ちに志を見えありく。是れを見つて、翁かぐや姫に云ふやう、「御身は佛、變化の人と申しながら、是れ程大さままで養ひ奉る志を疎かならず、翁の申さん事、聞き給ひてんや」と云へば、かぐや姫、「何事をか宣はん事は承らざらん。變化の者に

て侍りけん身とも知らず。親とこそ思ひ奉れ」と云ふ。翁、「嬉しくも宜ふものかな」と云ふ。「翁年七十に餘りぬ。今日とも明日とも知らず、此の世の人は、男は女に逢ふことをす、女は男にあふことをす。其の後なん門廣くもなり侍る。いかでさる事なくては御坐せん」。かぐや姫の云はく、「なんでふさる事かし侍らん」と云へば、「變化の人と云ふとも、女の身もち給へり、翁のあらん限はかうでも在せかし。此の人々の年月を経て、かうのみ容貌しつゝ宜ふ事を、思ひさだめて一人々々に逢ひ給へや」と云へば、かぐや姫云はく、「よくもあらぬ明日を、深き心も知らであだ心つき

なば、後悔のちへやしき事も有るべきをと思ふばかりなり。世のかしこき人なりとも、深き志を知らずでは、逢ひ難しとなん思ふ」と云ふ。翁云はく、「思ひの如くも宜ふかな。抑いかやうなる志有らん人にか逢はんと思す。かばかり志疎おろかならぬ人々にこそあめれ」。かぐや姫の云はく、「かばかりの深きをか見んと云はん、いさゝかの事なり。人の志ひとしかかなり。いかでか中に劣勝おとせたりは知らん。五人の中にゆかしき者を見せ給へらんに、御志勝おほりたりとて、仕つかうまつらんと、其のおはすらん人々に申し給へ」と云ふ。「よき事なり」と承うけつ。日暮るゝ程、例の集りぬ。人々或は笛を吹き、或は歌をう

たひ、或は唱歌しやうかをし、或はうそを吹き、扇を鳴らしなどするに、翁出て云はく、「忝へくもきたなげなる所に、年月を經てもものし給ふ事、ありがたく畏かしこまると申す。翁の命いのち、今日君達けふあすとも知らぬを、かく宣きんふ蓬萊だちにも、よく思ひ定めてつかうまつれ」と申も理ことわりなり。「いづれの劣勝おとせたりおはしまさねば、御志のほどは見ゆべし。仕つかうまつらん事は、其れになん定むべき」と云へば、「是れ善き事なり。人の恨にくしみもあるまじ」と云ふ。五人の人々も、「善きことなり」と云へば、翁入りて云ふ。かぐや姫、「石作皇子いしづくりのみこには、佛の御石の鉢はちと云ふ物あり、其れを取りて賜へと云ふ。車持皇子くるもちのみこには、東の海に白銀はつぎん

と云ふ山あるなり。それに石上しうがねを根とし、  
黄金こがねを莖くきとし、白き玉を實みとしてたてる木  
あり。其れ一枝折りて賜はらんと云ふ。今  
一人には、唐土もうししにある火鼠ひねずみの皮ぎぬを賜へ。  
大伴大納言おおともの たつには、龍の首に五色に光る玉あ  
り。其れを取りて賜へ。石上中納言いそのかみのには、  
燕つばくろめの持たる子安貝こやすがひ取りて賜へ」と云ふ。翁、  
「難き事にこそあなれ。此の國にある物に  
もあらず。かく難き事をばいかに申さん」  
と云ふ。かぐや姫、「何か難からん」と云  
へば、翁、「ともあれかくもあれ申さん」  
とて出で、  
「かくなん、聞ゆるやうに見  
給へ」と云へば、皇子みこだち、上達部かんたちべ聞きて、  
「おいらかに邊寄あたりよりだに心地ありきぞ、とやは

宣はぬ」と云ひて、うんじて皆歸りぬ。  
猶此の女見では、世にあるまじき持ものしけ  
れば、天竺てんちくにある物も持もて來ぬものはと、  
思ひめぐらして、石作皇子のみこは、心のしたく  
有る人にて、天竺てんちくに二つと無き鉢を、百千  
萬里の程い行きたりとも、いかでか取るべき  
と思ひて、かぐや姫の許には、今日てんちくなん天  
竺へ石の鉢はちとりにまかると聞かせて、三年  
ばかり、大和國やまとのくに十市群じしほりのに、ある山寺びんづるに資頭  
蘆の前なる鉢はちの、ひた黒にすみつきたるを  
取りて、錦の袋に入れて、作花つくりはなの枝につけ  
て、かぐや姫の家に怪もて來て見せければ、  
かぐや姫文あやしがりて見れば、鉢はちの中に詠ふみあ  
り。ひろげて見れば、

うみやま

海山のみちに心をつくしはてないしの

鉢のなみだながれけ

ひかり

かぐや姫光やあると見れば、螢ばかりの光

だに無し。

置く露の光をだにもやどさまし小倉山

おくら

にて何もとめけん

いだ

とて返し出す。鉢を門に棄てゝ、此の歌の

返しをす。

しら山にあへば光のうするかとはちを

棄てゝもたのまるゝかな

と詠みて入れたり。かぐや姫返しもせずな

りぬ。耳にも聞き入れざりければ、云ひ

かゝづらひて歸りぬ。かれ鉢を棄てゝまた

おも

云ひけるよりぞ、面なき事をば、はちをす

つとは云ひける。

くらもちのみこ

車持皇子は、心たばかり有る人にて、公に

おほやけ

つくしの

は、筑紫國に湯あみに罷らんとて、暇申し

て、かぐや姫の家には、「玉の枝取りにな

くだ

んまかる」と云はせて下り給ふに、仕うま

つるべき人々、皆難波まで御送りしける。

なには

みおく

みこ

皇子いと忍びてと宣はせて、人も數多率い

あ

ておはしまさず、近うつかうまつる限して

率て給ひ、御送の人々、見奉り送りて歸り

ぬ。おはしましぬと人には見え給ひて、三

日ばかりありて漕ぎ歸り給ひぬ。豫て事皆

おほせたりすれば、其の時一つのたからな

たはやす

りける内匠六人を召し取りて、容易く人寄

く

みへ

り來まじき家を作りて、かまとを三重に爲

し

籠めて、工匠等を入れ給ひつゝ皇子も同じ所に籠り給ひて、しらせ給ひたるかぎり、十六そを、かみにくどをあけて、玉の枝を作り給ふ。かぐや姫宣ふやうに、違はず作り出でつ。いとかしこくたばかりで、難波に竊に持て出でぬ。船に乗りて歸り來にけりと、殿に告げ遣りて、いといたく苦しがりたるさまにして居給へり。迎に人多く参りたり。玉の枝をば長櫃に入れて、物覆ひて持ちてまゐる。いつか聞きけん。車持皇子は、優曇華の花持ちて上り給へりとのしりけり。其れをかぐや姫聞きて、我れは此の皇子に負けぬべしと、胸つぶれて思ひけり。かゝる程に門を叩きて、車持皇子お

はしたりと告ぐ。旅の御姿ながらおはしたりと云えば、逢ひ奉る。皇子宣はく、「命を捨て、彼の玉の枝持ちて来る」とて、「かぐや姫に見せ奉り給へ」と云へば、翁持ちて入りたり。此の玉の枝に文ぞ附けたりける。

いたづらに身はなしつとも玉の枝を手折らでさらに歸らざらまし

其れをもあはれとも見で居るに、竹取の翁走り入りて云わく、「此の皇子に申し給ひし蓬萊の玉の枝を、一つの所を一つの所怪しき所なく、あやまたず持ておはしませり。何をもてかとかく申すべき。旅の御姿ながら、我が御家へも寄り給はずして、おはし

ましたり。はや此の皇子に逢ひ仕うまつり  
給へ」と云ふに、物も云はず頬杖をつきて、  
いみじう歎かしげに思ひたり。この皇子今  
更何かと云ふべからずと云うまゝに縁に這  
いのぼり給ひぬ。翁理に思ふ。此の國に見  
えぬ玉の枝なり。此の度はいかでかいなび  
申さん。人さまも好き人におはすなど云ひ  
居たり。此の度はいかでかいなび申さん。  
人さまも好き人におはすなど云ひ居たり。  
かぐや姫の云ふやう、「親の宜しふ事をひ  
たぶるにいなび申さん事のいとをしさに、  
取り難き物を、かくあさましく持て來る事  
をねたく思ひ」翁は聞の内しつらひなどす。  
翁、皇子に申すやう、「いかなる所にか此

の木は候ひけん、あやしく麗はしくめでた  
き物にも」と申す。皇子答へて宣はく、前  
一昨年おととしの二月きふふびの十日頃ころに、難波より船に乗  
りて、海中に出で、行かん方も知らず覺  
えしかど、思ふ事成らでは、世の中に生き  
て。何かせんと思ひしかば、たゞ空しき風  
に任せてありて、命死なばいかゞはせん、  
生きてあらん限かくありきて、蓬萊と云ふ  
らん山に逢ふやと海に漕ぎたゞよひありき  
て、我が國の内を離れてありき籠りしに、  
或る時は浪荒れつゝ、海の底にも入りぬべ  
く、或る時には風につけて、知らぬ國に吹  
き寄せられて、鬼のやうなる物出で來て、  
殺さんとしき。或る時には來し方行く末も